

【今年度の結果と取組みについて】

〇●国語●〇

(領域ごと)

- | | |
|------------------|---------------|
| ①言葉の特徴や使い方に関する事項 | 概ね良好な結果であった |
| ②情報の扱い方に関する事項 | 概ね良好な結果であった |
| ③我が国の言語文化に関する事項 | やや課題の残る結果であった |
| ④話すこと・聞くこと | 概ね良好な結果であった |
| ③書くこと | やや課題の残る結果であった |
| ④読むこと | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|---------------|
| ①選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ②短答式 | やや課題の残る結果であった |
| ③記述式 | 概ね良好な結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

・もっとも正答率の高かった設問は目的や場面に応じて質問する内容を検討することができるかをみる問題であった。一方で、正答率の低かった設問は、文脈に即して漢字を正しく書くことができるかをみる問題であった。
・無解答率がもっとも低かった設問は選択式の問題で、記述式の問題の無解答率が高い傾向があった。

分析

全国や大阪府と比較して非常に正答率が低かった問題は、「目的に沿って自分の考えをまとめて書く」問題であった。日ごろから意見文、小論文など様々な文章を書くことに取り組み、主体的に考えて文章を書く習慣ができつつある一方で、書く内容については課題があり、一人ひとりの生徒に合わせた支援や補習等をていねいに行っていく必要がある。どの生徒にも国語力の定着をはかる指導をめざしていく必要があると考えている。

また、「読むこと」「話すこと・聞くこと」に関する問題については、正答率が高い。これは1年次から読み取りや様々な発表に取り組んできた成果が表れていると考える。自分の考えを根拠をもとに伝える力や、相手に的確な質問をする力が全国平均より高いことから、コミュニケーション力や表現力に力を入れた授業が効果的であることもわかった。

一方で漢字を書く問題の無解答率が高い。スマホやタブレットを使用することが増え、「書く」回数が減っているため、漢字の練習をするだけでなく、漢字の意味や部首も合わせて覚えるような授業づくりが必要である。

(領域ごと)

- | | |
|---------|---------------|
| ①数と式 | 概ね良好な結果であった |
| ②図形 | やや課題が残る結果であった |
| ③関数 | やや課題が残る結果であった |
| ④データの活用 | やや課題が残る結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|---------------|
| ①選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ②短答式 | 概ね良好な結果であった |
| ③記述式 | やや課題が残る結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

・もっとも正答率の高かった設問は、「数学と式」に関する「2」の問題場面における考察の対象を明確にとらえることができるかどうかをみる問題であった。一方もっとも正答率の低かった設問は、「データの活用」に関する「7(2)」で複数の集団のデータの分布の傾向を比較して捉え判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる問題であった。

分析

1 傾向

全国や大阪府と比較して正答率が低かった問題は「関数」の問題であった。正答率が高かった問題は「数と式」の計算問題や「データの活用」の問題であった。

2 成果

「数と式」の計算問題は毎時間の復習の時間に、問題を解く機会をもってきたことから、復習することが学力の定着に効果的であることを示している。

3 課題

「関数」については、グラフや式を用いて事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができるかどうかをみる問題が特に課題が残る結果であった。

問題文から必要な情報を読み取り、数学的に考える力を育成することが今後の課題である。

4 授業での重点的な取組み

問題文から情報を読み取ることに苦手意識のある生徒が多いため、生徒の興味を引くような課題設定と生徒同士の教え合いができるような環境づくりを行っていきたい。

(領域ごと)

- | | |
|-------|-------------|
| ①聞くこと | 概ね良好な結果であった |
| ②読むこと | 概ね良好な結果であった |
| ③書くこと | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|-------------|
| ①選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ②短答式 | 概ね良好な結果であった |
| ③記述式 | 概ね良好な結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

・もっとも正答率の高かった設問は、情報を正確に聞き取ることができるかどうかをみる「1(1)」の問題であった。一方もっとも正答率の低かった設問は、日常的な話題について、事実や自分の考えなどを整理し、まとまりのある文章を書くことができるかどうかをみる「10」の問題であった。

分析

- 1 傾向 全国平均と比較すると、下回る項目もあるが、正答率はほぼ同じ同等である。
- 2 成果 最も正答率が高かった「聞く」ことに関しては、毎時間英語の歌と単語の発音練習を繰り返していることで、聞く力が身についていると思われる。また、基本的に授業をオールイングリッシュで進めていることや、NET の活用をとおして生きた英語に触れる機会を充実させていることが成果に繋がっている。
- 3 課題 事実や自分の考えなどを整理し、まとまりのある文章を書く問題に課題が残る結果であったため、グループ学習・ペアワークの強化、自分の考えを英語で表現し、英語で書ける場面を増やす必要がある。
- 4 授業での重点的な取り組み
言語活動において「話すこと」に関しては、リンキングに重点を置き、会話形式、プレゼンテーションを実施するが、少し長い英文になると、英文の切れ目に戸惑うところがある。今後も視聴覚教材を活用し、子どもたちが興味を示す必然的な教材を提供し、自由に表現できることを目指している。

〇●経年比較●〇

全体的な傾向についての分析

昨年度と比較して平均正答率は、国語、数学ともに下降している。

今後は基礎・基本に立ち返り、繰り返し反復することでアウトプットできる学力を身に着ける授業づくりや、行事等の取り組みも含めて生徒の自己肯定感・自己有用感を育みながら、主体的に学習に取り組める環境づくりを進めていく必要がある。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

国語：高位層が減少し、低位層、中間層が増加している。

数学：高位層、中間層が減少し、低位層が増加している。

2教科とも高位層が減少しており、全体的な学力の低下が課題となっている。

今後は基礎・基本の定着を図るための授業づくりを目指す。

〇●取り組み●〇

学力向上に関する取り組み

1 基礎学力の定着

① 英語科と数学科の習熟度別授業の展開

② 英語：単語テストの実施

・英作文を書かせるために、単語力を身につけさせ、英語の表現力に幅をもたせるために定型文を反復させる取り組みを行う。

数学：5問プリントの実施

・毎授業5分程度で既習事項からの5問をさせ、反復させる取り組みを行う。

国語：漢字の書き取り練習の実施

2 言語活動の充実

① 英語：トピックスを使用し毎時間会話練習を行う。

② 数学：班隊形になり、自分の考えや解き方を周りに説明する活動を行う。

③ 国語：調べ学習の発表や教科書の内容の劇を行う。

3 授業方法・内容の工夫と改善

① 全体：毎回の目標を決め、意識させる。

授業の流れがわかるように子どもたちに提示する。

② 英語：授業の理解度の確認のために、振り返らせる。

数学：ICTを活用し視覚的にわかりやすい授業づくり。

国語：自主学習ノートを活用した主体的に取り組める授業づくり。

4 学校全体としての取り組み

① 校内授業研究

学力保障のテーマに沿った研究授業を教師全員で見学し、その後全体で意見交流や指導助言をいただき、よりよい授業づくりに役立てている。

② 学年別授業研究

校内授業研究を経て各学年でも研究授業を行い、より生徒の実態にあわせた授業づくりについて考える機会を設けている。